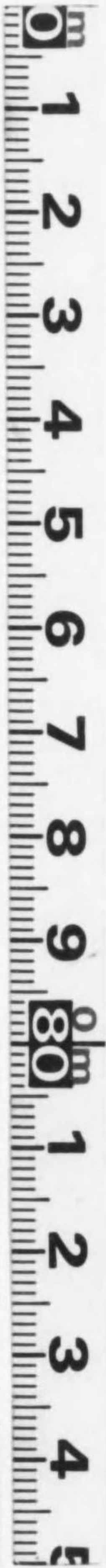


175

日本神話の本義



287  
特251  
869



始



特251  
869

はし かき

是迄日本神話には哲學なきものとされた。

然るに其内容に深く反省を致すとき、非常に高遠なる理想のもとに、未だかつて他教に説かれざりし真理を含まれたるものであつたと窺はれます。曰く鏡の哲學と相對的真理に立脚した民族性宗教にして、更に四神一體論を併せて、是によつて始めて日本神話の尊嚴に接することが出来るかと考へます。

茲に日本神話に對し、案りに解釋を試みることは、大に慎まねばならぬことと存じま  
すはれ共、法によつて人に依らされ」と申されてある如く、皇道信仰の中に自己の眞  
實を見出す爲めに、神典の精神を己れに明らかにすることの、尤も大切なる所以と考  
へます。

昭和十三年十月

## 目次

一、神と真理……………	一
二、真理の相對性……………	一八
三、四神一體論……………	二六
四、日本肇國と建國……………	四七
五、桃太郎主義……………	五三

## 日本神話の本義

### 一、神と真理

吾人の暇趨は真理である。あらゆる生活手段の上に真理を探究して止まぬ。真理は人生の光明であり指導者である。されば非真理を奉ずる者は常に亡びて行かねばならぬ。如何なる覇者王者と雖も、自己の慾求のために非真理を真理たらしむること能はざるは、歴史の興廢が證明する處であり、短かい一生の間にもよく之を自得することができぬ。

然らば真理とは大凡如何なるものかを探ぬるに、多くは抽象的概念を以て單純に考へられて居る。即ち慾求の實現する原理であり、理想の原則の如く考へられて居る。然れ共審さに之を分拆すれば、左の三つの方法によつて、真理非真理を決定されねばならぬ。

一、觀念相互の關係から判定すること。

- 二、断定相互の関係から決定すること。
- 三、観念と断定の関係から決定すること。
- 右の三項の何れかに當てはめて見ねばならぬが、各項について考ふるに、
- 一、観念相互の関係といふのは、事實の證明をまつ迄もなく、相互の観念が符合するか否かを直観して、眞理非眞理を判断するのである。數學的證明は之に類する。二に二足すの四は考ふる迄もない。然し應用を誤るときは眞理たることはできぬ。
- 例へば鉛筆二本と筆二本を合せて、鉛筆四本とすることもできぬ、筆四本とすることもできぬ。九羽の雀を鐵砲で撃つて、四羽落ちた後に何羽残るかといふ問に對して零だと答へる。これでは算術の問題にならぬ。又幾何學には甲量と乙量と等しく、乙量と丙量と等しければ、甲量と丙量と相等しいといふ。至つて平凡なる定理であるけれど、この應用を誤つて、紙は纖維であり、人絹も纖維である。故に紙は人絹なりといふたら笑草になる。
- 二、断定相互の関係から眞理非眞理を判断する場合、甲の断定と乙の断定とが一致すればよいが、互いに矛盾する場合、何れか一方は非眞理とせねばならぬ。

例へば地球の引力を發見するのに林檎が樹から落ちた。然るに梨も落れば柿も落ちる。故に地球の引力は眞理なりと悟る。更に石も綿も同じ速さで落ちることを實驗した結果、落下の速度は質量に關せずと知ることができた。然るに此應用を間違つたら變なものになる。例へば蛇は蠶よりも強く、蠶はナメクジよりも強い。故は蛇はナメクジよりも更に強いといふたら、兒雷也が抗議を申込むに違いない。次に

三、断定と観念の関係から眞理非眞理を判断する場合は、一つの観念が事實を以て證明されねばならぬ。例へば電氣は危険なりといふ観念を持つて居る。電線泥棒が黒焦けの死體となつて停電せしめたといふ事實があつたならば、電氣の危険だといふことを悟るのである。昔は雷を雷神が太鼓を叩いて、空を駆け廻つたものゝ如く解したが、電氣學の進むに従つて陰陽の中和といふことが證明され、今日之を信するものはない。斯くして地球が平面であつたことや、月の中で兎が餅をついて居たことや、天然痘が神罰であつたことや、共產主義を禮賛したことや、邪教が群衆の盲信を利用して不正をなしたことなど、何れも認識を誤つた處の非眞理を奉じた結果の所産であつたと考へられるのである。

先づ以上の三つの方法によつて、眞理非眞理を判定せねばならぬのであるが、何れも經驗に出でて經驗が證明する處の實在の確認といふに過ぎない。即ち吾人が經驗によつて形成したる處の實在に關する確信を、再び經驗の上に事實に應用して、其正否が判定されるといふのが、眞理確定の根本である。されば眞理は文化の發達に伴ふたものといふべく、人生の一生に於ても、前半よりも後半に多くを集積される。故に經驗上の事實に背く時は眞理たるの價値が無くなるから、事實即眞理といふのである。

即ち多くの事實が證明する必要があるから、萬人の信する必要がある、複數的眞理たることであるが、多くは抽象的眞理を喜び崇とぶ傾向があつて、自分だけの眞理、單數的眞理となり勝ちである。眞理は比較的平凡なものであるけれ共、世人は具體的の事を輕んじて、抽象的の事を重んずる通弊が存する爲に、神秘といふよふなことに勿體つける。されば吾人の信仰上の神佛にしても、只に憧憬の幻影といふに止まつては、架空的にして偽信仰となり、迷信となつて久遠の信仰となり得ないのである。

吾人の信仰對象として抽象的慾求は、先づ佛は無量の慈悲を垂れ給ひ、無限の生命の中に福德圓滿の光明であらせられ、時間空間を超越して、横に十方を極め縦に三界を貫くといふたならば、誰れでも隨仰するに相違ない。人間の慾求を極度に満足せしめたよふな絶對者なれば、萬人が萬人之を尊とぶに決つたことであるけれ共、頭から斯様な方が神佛たといふたのでは、只に飽くなき人間の慾望に迎合したのみで、何が何やらサツパリ解らぬ。斯くの如き神佛の禮讃は、恰も虹を追ふにも似たりといふべく、何處迄遂ふても向ふに見へる。遂ふても遂ふても逃けられるから、現世のことではなくて來世のことになる。

然らば抽象的神佛を離れて別に具體的に其存在を認めるものがあるか、之を經驗することができるかといふに、夫れは宇宙それ自體であつて、宇宙の實相を觀破するとき、萬有は非萬有にして神たらせ給ふのである。されば神は萬神の働らきとなり、萬神は一神に皈一して統一體たり給ふと悟るのである。神は空間的には眞善美一體のマコトにましまし、時間的にはイノチとして無窮生命たらせ給ふ。其まことよいのちの融合點に立ち給ふ神を、天照大神と尊稱し來る。日本神話は此眞理原則を述べたる信仰叙述である。他教が慈愛仁の至情を信仰の樞軸となしたるに對して、日本神道はまことよいのちを以て神の徳と教へられます。他教は單數自覺の徳を中心より周圍に説き及ぼされ

たるものゝ如く、日本神道は八百萬神の綜合樹立になる處の複數的神徳を、周圍から中心に歸納せられたるものと解される。

さて人間は智情意を内容とした處の心を所有する靈的動物である。此靈性によつて自然と人生との關係を研究する。そこで自己が觀察の中心點となりて周圍が考察される。此如き觀察の大地に立つことを中心自覺といふ。自己中心より宇宙を見ると、唯物論となり唯心論となる。然し大切な自己其ものを研究することを忘れては、總てが懷疑的に終らねばならぬ。此點に關し夏目漱石先生の猫は次の様に觀察して居る。

凡て人間の研究といふものは、自己を研究するのである。天地といひ、山川といひ日月といひ、星辰といふも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を描いて他に研究す可き事項は誰人にも見出し得ない譯だ。若し人間が自己以外に飛出す事か出來たら、飛出す途端に自己は無くなつて仕もふ。而し自己の研究は自己以外に誰もして呉れる者はない。いくら仕てやりたくても、仕て貰いたくても出來ない相談である。それだから豪傑はみんな自分で豪傑になつた。人のお蔭で自己が分る位なら、自分の代理に牛肉を喰はして、堅いか軟らかいか判斷のできる譯だ。朝に法を聞き、夕に道を聞き、梧

前燈下に書卷を手にするのは、此自證を挑發するの方便に過ぎぬ。人の説く法の内、他の辨する道の内、乃至は五車に餘る蠶紙堆裏に自己が存在する所がない。あれば幽靈である。尤もある場合に於て幽靈は無靈に優るかも知れない。影を遂へば本體に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本體を離れたものだ。この意味に於て主人が鏡をひねくつて居るなら大分話せる男だ。」  
鏡の哲學の緒が説いてある。日蓮上人は南無妙法蓮華經を創始されて、觀心本尊といふことを申された。つまり佛の本體を外界に深すのではない。自分の心の中に見出せと申されたのである。そこで自分の心を全面的に寫したのがマンダラで、マンダラの中に久遠の本佛を拜む。マンダラは自分の心を寫した鏡だと申された。

然るに日本神話は心を其まゝ鏡と悟れよと申されてある。天孫御降臨に際して、天照大神は三種の神器の内、特に鏡に添へて御念入りの御神勅を下し給はつて居ります。そこで自分の心を鏡として、自己は勿論周圍の現象を寫して見るとき、宇宙は神の靈によつて活動が表現されて居ると悟る。人間の心が不滅でなくて、神の靈が永遠無窮と悟る。之が日本神道の根本だと考へます。即ち吾人は日常に於て、認識の相違といふことについて居る。少くも基礎觀念として居な

い。例へば吾人の認識の凡てが、甲乙丙丁の間に同一物をつかむものゝ如く考へて居る。然し其認識は稍々似て居つても同一ではない。即ち物の長さ大さを見ると各人の視力に應じて同一に認識されないのである。暑さ寒さに於て然り、各人の體驗が一人一人に相違して居る以上其異つた經驗を土臺として、あらゆる感受作用が程度を相違する。只多數決を眞理と名付け、實在と假定して行くに過ぎないのである。されば誰れの擱んで居るのが本當かといふ本當のものが無い。然るとき恰も鏡に向つて自分の顔を見るが如く、各自に投影を捉へたものであつて、似たものではあるが眞實をつかむことが出来ない。故に第二現象を觀て居るのではないか。只神のみが眞實たらせ給ふ。故に日本神話は人間の心を鏡とされて居る次第と思はれる。

されば日本神道の根本は、他教のそれと相違するのであつて、神の靈以外人間の靈はないと見る。之れ日本神話の鏡の哲學であります。神話の中に高彥根神は此理を説明されて居ると解されます。さて人間の智情意は最初から完全に備はつたものでない。即ち初めに無意識時代で情に強く、次に意識時代で意に強く、終りに目的を意識する時代となつて智が發達するといふのが順序であつて、體驗の集積が眞理を發見する。斯様に大體三段に進步するのであるから、老境に發見したものを直

ちに他に強いた處で、受入れては呉れない。次ぎ／＼に生れて來る人間が、斯様に段階の第一歩から踏み出して行かねばならぬ。然し踏み直す間に、前者の發見が土臺となつて、新しいものが集積されて行く。そこに文化の發達がある。故に眞理といふものは、時代と共に變遷する。故に眞理が人間に有用な價值批判の内にあるものとせば永遠不變といふことはない。即ち人間本位に觀察する處の人生觀、宇宙觀には變化を免れないが、只民族的立脚點から捉へられた眞理には、萬古不滅の絶對性が存する。斯くて民族的自覺によつて、樹立されたる眞理に偉大なる尊嚴がある。此絶對眞理の中に見出される處の光明を、神と稱するのである。

そこで日本神話を反省するに、宇宙の眞理が動きつゝありと見る。又民族的立場に於て流れ動きつゝある處の、人間の生命軌道上から觀察されて居る相互の關係が、相對性である。其双方の相對を把握されて居る神を信ずるといふのが、日本神話の眞精神なりと悟られます。此關係を卑近な例にとれば、射的の遊技に於ける的と人との關係は靜對靜であり、足許から飛び立つ雉子を撃つのが動對靜であり、やぶさめは靜對動であり、奈須與市が扇の要を射たのが動對動である。又水車と流水の關係も、光りと地球の關係も亦動對動である。此動對動に最も至難なる最高原理が存する。全く

言外の理と申すべく、日本神道に言挙げを排されたる所以と存じます。

アインシュタインは相對性原理を唱導されて、科學の根底に一大基礎を與へた。日本神道の立場が丁度之と同一であつて、人生觀に一大基礎が與へられてあつたと、有難く尊く拜される。即ち一は、物質文明の改革であり、一つは精神文化の極致であつたと、斯様に對比して考へられる。故に日本神話は他教とその根本に於て、大なる相違があつて、教義の末節に優劣を争ふ様な點はない。然しアインシュタインの相對性原理が唱へられた處で、世の中が別に異つて來たといふのではなく、眞理が発見されたといふに過ぎないことで、今日其實用範圍がせまい。應用の深さに於ては特別の方面では絶對的であらうが、吾人の日常には從來の儘で差支へないから、一般が無關心である。

日本神話も同様に、今日迄の宗教道德が日本的のものに培養されてあるから、今日直ちに日本神話によつて取つて代らねばならぬ必要はないが、然し夫等の一切教が群立する處の地盤は、皇道信仰にありと云ふことは明らかでなければならぬ。されば各派各宗が慈愛仁を説いて、それが開祖の説かれたるの故を以て、絶對のものと固執したら大なる誤まりとせねばならぬ。特に靈感的の妄想到於て然りとする。

そこで人間本位といふことは、相對世界の靜的觀測であり、眞理は文化と共に向上するが、神の眞理は時間空間に超越して行き詰りが無い。即ち皇道信仰は永遠不變にして無窮の原則である。然し神の表現は相對を離れて得られないことであるから、信仰上の現實界といふのが、絶對と相對の融合せる世界で、之を中ツ國といひ、魂の世界である。そこで動的な人生觀宇宙觀に於て、反省の端緒にいのちを發見する。次に宇宙のまことを發見する。いのちとまことの融合が神の世界に現出され、之れが民族意識に於ける綜合生命としての活動となるものと解される。吾等日本民族の祖先は、此いのちとまことの湧出する處を高天原と稱へられ、日本神道を樹立されてあつたと悟るのであります。

渥美勝先生の『日本の生命』の一節に曰く、

生命は只生命によりてのみ出づるなる、其生命の順序に沿ふて、出現の其本を尊とびつゝ、生命は只生命によりてのみぞ、保たれ展ばさるゝなる、其次第の順序に沿ふて存續の、其末のいやひろいやさかの望みと勵みをかけつゝ、本を中心に自然の出現發育に秩序を整へて、例ふれば有機體を其根幹枝葉を集めて、其細胞をつらね、而も一體として養分の液汁を通はす如くに、自然の儘なる



人情の動きを素直に通はすことによりて、殆んど反射作用的に行はれ得たともいふ可き、相互扶助の現はれ方を以てして、共存の道を末梢迄とることによりて、群集生活に平安と共悦と分苦とを取扱つて來たのであつた。之は生命の本源に於て神を天御中主神として認め、人間生命の増殖を天之益人なる尊稱を以て呼びなしたる處に、明らかにかゝる事實を觀取し得るのであるが、此ことを人情自然の現はれとして踐行せりしことは、言ひよふもなき美はしきものであつた。」

斯様に民族生命が、卵の胚芽の如くアシカビの如く、すくすくと展ひる處に於て、天御中主神を信仰する。そこで民族意識が國家建設に於て、吾等の個性を撫養する處の大八洲なる國土を自覺する。之が諸冊二神の國産みの神業となつたのである。

『日本の生命』に續いて曰く、

日本は自らいふ處の高天原生活を東大陸の極東地上、最大の水域なる太平洋を控へて、東は西大陸に、南は南洋大陸に、相向ふる北半球緯度に點綴して、四通の衝に當れる大八洲群島に創始した。所謂國生みと稱するものは即ちそれであつた。」

而して諸冊二神は日本民族の彌榮實現に魂を授け給ふのであつて之を神産みと稱する。其彌榮の樞

軸をなすものは高天原のまことである。然しまことは簡單に生れない。即ち人間一切の邪心を捨てねばならぬ。之れ民族意識の確立であつて、諸神の禊祓によつて神示し給へる處である。

次いで天照大神の御誕生となつて、高天原を御統治遊ばされます。又民族精神の統一する世界を中ツ國と稱し、之に素神を配し給ひ、物の世界を根の國と稱し、之に月讀命を配し給ふた。根の國の内容は總てが人間本位で、個人主義、自然主義の妄想から一切の罪穢れが生れて來る。そこで此世界の罪障を知らしめむために、冊神は諸神と別れ給ひ、根の國に止まり給ふたである。

そこで素神は先づ高天原に參上りせられて、天照大神と共に民族の自覺を訓へ給ふ。而して永遠不變の天道として五道を與へられ、五道を踐行するために授け給ふたのが三徳である。三徳は人間一代の内に修得せねばならぬから、非常な努力を要する。然るに人間の本性は、朝に道を聞いて夕には妄想に歸るといふやくざである。人間の智情意が最初から完備したものならば、無難であるけれ共、不幸にして疑惑、貪慾、憤怒の如き穢れのために大なる矛盾に逢着する。依つて天照大神は天の岩戸に隠れ給ふ處となつた。そこで民族共同の努力を更生し、天岩戸開きを奏請して三魂を下し給はつた。之れ和魂、荒魂、幸魂の三魂である。然し三魂のみでは相互作用がないか

ら、綜合魂たる串魂を授け給はつた。串魂は民族の横に貫き、縦に貫く處の民族精神である。其串魂を完成する努力が尋常一様でないことを、大國主命の御修養を以て範を示されてある。而して大國主命は素神の御延長として、綜合我を以て國主の資格を備へ給ふた。即ち大國主命の國土を完成されたる處に於て、始めて天孫が降臨し給ふたのであつて、五道と三徳が天地相結んで、歸一の世界が創建されたのが、中ツ國の日本肇國と申し奉る處と拜察するのであります。

茲に大國主命の御名は素神より國主たる資格に對して賜はつたものにして、其の以前四ツの神名をお持ちになつて居ります。即ち大穴矛遲神、葦原色許男神、八千矛神、宇都志國玉神の四であります。之れ和荒幸串の四魂を備へ給へる、夫々の資格を表現されたる神名にして、民族精神の内容を説明されたる如く解されるのであります。

又大國主命は素神より六代目の御孫としてあります。茲に信仰上から拜察しますとき、歴史的に見た系統上の數とのみ解されない。即ち大國主命の神格を完成される迄には、容易ならぬ御修養であつた。其反省の體度に段階を見て、六代とされてあるものではないかと窺はれる。神典には六代の順序が明らかに書かれてあります。然し佛教にても六道四聖を十界と申され、餓鬼の世界から佛の

世界迄十界の順序を踏むが、それが必ずしも十界の段階の意に非ずして、人間の心の中に存する十通りの働きたとされ、十界互具と申されて居ります。故に大國主命の六代の意味も、むしろ全面的に羅列された魂の内容と前後の關係の描寫ではないかと解されます。即ち素神と共に七代となります。故に天神七代に於ける高天原の神靈の展開が、天地相照して國ツ神の上に移されたる處と拜察されるのであります。即ち素神は高天原の國常立神の位置に相當され、大國主命は諸神の位置に相當されます。

又大國主命は素神より三種の寶器（生太刀、生弓矢、天沼琴）を授けられました、現シ國の國主となり給ふた。其三種の寶器を以て八十神達を黄泉ツ平坂の麓に追ひ伏せ、河の瀬に追ひ拂ひて、高天原に千木高く、宇迦之山に宮柱を建てよとの詔りをお受けになつて居りますことが、人間本位の自覺に伴ふ凡ゆる矛盾の征服にして、迷ひの世界から悟りの世界に入ることに外ならぬと考へます。さて『日本の生命』に次の様にいふてある。

斯くて本を本として立つる、いと最中に光りを高きに仰ぐ、いと高き皇の道は定まつた。大衆生其秩序を得、秩序を保持し乍らに、其各個の創造性を充たし、又各々の其所を得て綜合的大創成の

一部を擔當するの榮を、高大御座を親とすることによりて子として、之を君とすることによりて臣として、御國の大御寶となつたのである。皇祖を大御神、皇位を大御座、臣民を大御寶、本位と中位と下位と三位其所を得て、一體にして相互生命の貫流に於て、平等なる敬愛の中に大秩序を保ちつゝ、個我と綜合我との上に創造的生命を展開する家族的生活の集團を創始した。是ぞ日本と呼ぶ國我を自ら呼んで我國體と稱するものは即ち之を指していふのである。此處には國は其儘家としてゝあつて、人は皆大創造に寄與貢獻するの創造の分掌者として、互に同胞として、兄弟姉妹として活きる。かくて周圍を見渡すときに、他の群生が或は單に功利に、或は單に快樂追及に、其生命の基點を占めしめて、擾亂紛糾の限りを盡せるを見しとき、之と比較して我等誠に高天原の最中に立てりといふ、實感を持ちたりしことであつた。従つて此世の幸と榮とを群生に分たむことを思ひ立つとき、自己等を天孫と呼び、福音頒布の實現を天降りの運動と稱へしことは、以て其自任と抱負と天務とを兼ねて言ひ表はせし用語であつた。』

斯くの如き實感と實踐の上に日本は實現されたのであつた。されば日本肇國は日本民族の協調的な綜合樹立になる處の信仰であつて、天孫御降臨以來、皇統連綿として世々神國の嚴然たること

は、同時に此信仰の實修の連続にして、人間本位に建設されたる王道覇道の國と同日の比に非ず、全く神業にして御稔威は日本神話の最高原理と悟るのであります。

かよふに吾人の人生觀は其觀察地點を轉換すべきである。人間が自分の立場から自己を見たとき、それは自分ではない。即ち神を通じて見たとき始めて分る可きもので、衡器によらねば自己の體重が認め難きに似たものである。同様に國我の反省は人間本位でなく神が基本である。國我の眞理は其決定條件が全然相違する。人間の立場が神の營みの中にあり、自分が國我の一細胞として行くより外に道がないと悟るとき、そして其生命が民族意識によりて流れ動いて居ると悟るとき、自己の立場は常に流動しつゝある。吾々日常の生活を川に例れば河川の中の一掬の水に相當する。水源より出て相互に鄰り合ひ、隔つる處なく流れ行き中流に動いて居る。而して再び元の水源に立ち歸つて流れをなすことは不可能であるから、自ら行く處迄行かねばならぬ。そして自分一個としての生命は、川の盡きる處に於て無くなる。然し川の生命は後より進み來る處の水によつて惟然として流れの盡き果てることはない。之れ民族の無窮生命である。即ち神國日本を守りつゝある處の、日本民族の發展は大河の生命に比す可く、神に導かれ、神と共に生きて行く。

天照大神は天真名井の湧水に十束の劍をふり激きて三徳を生み給ひ、同じく素神は曲玉より五道を生み給ふた。即ち徳は神のまことより出で、道は無窮いのちと共にあり。いのちとまことの融合の上、眞の道徳は生れて來る故に神に仕ふる道である。よつて天照大神の御子は五男神で素神の御子は三女神とされて居る次第と拜察されます。

斯様に、日本神話の道徳は儒教のそれと趣きが違ふ。日本肇國を易の陰陽五行説に附會するものあれ共、尊とき祖先の信仰は左様單純に、片付けらる可きものにあらず、眞に日本神話の眞髓に觸れ奉つて、國體の尊嚴を知らねばならぬことだと、深く深く自省して止まざる處であります。

## 二、眞理の相對性

以上の如く、日本神話の精神に觸れて見ると、日本肇國の信仰が實に高遠なる理想のもとに、神の國が彌榮えつゝあることが誠に氣高く拜まれます。然るに日本神話は古代史として神代の卷とのみ見られ、日本肇國の尊嚴の中にも何だかお伽噺の如く不合理の端々がある。之迄かよふに考へて、

其反省に不眞面目であつたから、日本神話の根本にふれる道理がなかつたのである。然るに反省の體度を代へて見ると、誠に壯嚴偉大なる點に接する。そこで反省の體度如何といふに、ものゝ見方には觀察者の立場が尤も大切なる基本として、決定されて居らねばならぬことである。相對性原理によれば其點がよく解る。但し相對性原理其ものは科學であるから何でもないが、觀測の態度が參考になるのであつて、此點を誤つてはならぬ。

そこで説明の中に、汽車と軌道との關係が引例してある。今軌道上に汽車が走つて居る。觀測者甲が汽車の窓から石を落とす。甲が窓から落下の状態を見ると、此石は直線的に落ちて行く。然るに觀測者乙が軌道上から之を見ると、拋物線を畫いて落ちて行く。然るとき石の落下は直線が本當か、曲線が本當かといふ疑問が起る。けれ共何れも本當である。即ち觀測者の立場を決定することによつて、何れも眞實なりと言へるのである。今甲の立場を基本とする坐標を甲系とし、乙の立場を基本とする坐標を乙系とする。然るとき、甲系は運動系であり、乙系は静止系である。吾人の日常周圍に對して認識する世界は、自己を中心としたる静止系であり、自己の周圍に現象を表現するものを、實在として取扱ふて居るが、實は自己も周圍も共に變化しつゝあるが故に、實在といひ現

象といふも、自己が變化の中に流れつゝありと知るとき、其認識に誤謬がありはせなかつたかを考へさせられる。

次に圓盤の廻轉を考へる。今圓周上に甲なる観測者が居り、中心に乙なる観測者が居つて、何れも同一型の時計を持つて時刻を合せ回轉を始めたとする。圓周上の甲は回轉運動をなし、中心にある乙は静止して居る。此關係は、甲は汽車の車上に相當し、乙は軌道上に相當する。今甲乙各々の時計の動きを検するに、甲の時計は運動の影響を受けて、乙の時計よりも遅れるのである。故に甲と乙とが時間の争ひをなしても、何れが嘘とも本當ともいふことは出来ぬ。即ち甲の運動系にありては遅れるのが本當であり、乙の静止系にありては、より進むのが事實なのである。故に運動系統が同一なれば、同一條件で眞理が成り立つが、他の運動系中に持つて行つたならば、それが變形させられる。今、地球は太陽の周りに公轉自轉の回轉をなしつゝ、重力の場を作つて居る故に、太陽より來る處の光線は直線である可き筈なれ共、相対性原理の證明する處によつて、曲線となつて到達するのである。故に運動系に於ける最短距離は曲線なりといふことになる。然るとき幾何學の定理が應用されなくなる。吾人の机上に甚だ不満足であるけれ共止むを得ぬ。又時間も嚴正なる意味に

於て絶對時間といふものはない。故に回轉の中心に立つ観測者から見れば、静止系の眞理が成り立つ様であるが、實は抽象的眞理にして、人間本位といふことが凡ゆる矛盾の根元になるのである。今人間が宇宙の流れの中に泳ぎ乍ら、自己の中心自覺の上に永遠不動の眞理を掴まむとするも、それは不可能であらう。又相對絶對といふも觀念と事實とが食ひ違ふであらう。宇宙は空間と時間とが表裏せる四次元の存在である。

斯様な全體の立場に自覺することを、全一自覺と假に稱する。そこで事實上の人間の立場如何といふに、恰も河川の流れに掉す如く、民族と稱する流れの中に許容された存在である。今日迄の吾人の通念は、宇宙を時間と空間の二ツの因數に分解したが、實は同時に起る一つの現象の、表裏した二様表現である。故に時間と空間の融合形を觀念せねばならぬ。然るとき其實相が神の活動であり、其融合點に立ち給ふ神を、民族の立場から天照大神と稱へ奉る。神話に於ける天岩戸開きは、思兼神の御智慧が之を明らかにされて居る處であります。

さて茲に水道の鐵管に水が充滿されて、水源には無限の湧水があり、他の一端からたえず放出されるものと假定する。之を流動系といふ。然るに鐵管も共に動かねば、水が動いて居らぬかの如く考

へられ易い。次に一端の放水を止めたならば、鐵管内の流動がとまる。然るとき、鐵管の中は空虚ではないが、水は充滿した儘の靜止系である。茲に流動系と靜止系と見掛上の相違はないが、同一に見ることは出来ない。即ち靜止系は三次元存在であり、流動系は四次元存在である。民族意識は四次元のことであり、個我が周圍と共に流れて行くことである。自分一個といふ人生觀は事實上成立せぬ。外國思想は中心自覺の上に、あらゆる物質文化を建設したが、精神文化の上には、之が逆行して共產主義に墮落した。然るに日本祖先は人間本位の誤謬から超越されて、神乍らなる天孫文化を建設されてあつたのである。實に偉大なる文化の創設であつたと申さねばならぬ。日本神話に對して、太古矇昧の迷信と輕視したるを愧ぢ入らねばならぬ。

そこで日本の肇國は宇宙の相對的眞理に表現された、いのちとまことの二大基調の中に天孫の降臨によりてのみ中ツ國が生れ、世々天孫の御延長を一天萬上と崇め奉り、民族が中心歸一の信仰の中に生きてゆくといふのが、根本であると解します。

日本神話の内容にふれて見ると、民族とは必ずしも血族の上のみからいふ處の、民族の意に非ず、信仰を同じふするもの團結と解される。地球上あらゆる國の内、眞神の使命に立つ國は日本以外にないから、日本民族といふことが、狹義であり乍ら又代表名である。狹義日本民族も古來血族的に日本國土内に生れたもの許りでない。澤山な支那朝鮮から歸化せるものがあつて、而かも我國土の天地に撫養せられて、混血の儘に信仰が同化してしまつた。それでも日本民族である。然るに外國思想は個我的自覺が人間本位となつて居る。漢たる人類愛には實踐が伴ひ難い。そこで宇宙が天地人の三界にして、天は時間と空間の融合せる世界であり、地は宇宙を時間と空間に分解した變化の世界と見られ、心が鏡としてその双方を描出する。月は夜毎に變形して止まず、されど太陽は常住の光源なり。即ち月影は太陽の投影である。されば天に天照大神を配し、地に月夜見尊を配された所以と解します。而して神の國が信仰によつて、現實化されたのが中ツ國と解されるのであつて、世界の平和といふことが、其實踐は皇道信仰が普ねく世界を潤はすことに外ならぬと考へます。さて人間本位の觀念で宇宙は相對の世界である。明暗、善惡、上下、左右、物心の如くあらゆる言葉が、他と對比してゐる。斯様に認識といふことは靜止系坐標にあつて、一つの中心から觀測したとき、捉へることが出来る。故に自己中心は相對の中心を自己に自覺したことである。そこで甲乙丙丁夫々の中心を以て集合する。地上に立つて見るとき、汽車の窓から落ちるものが曲線を畫く如

く、自己本位で日本神話を見たらば、危らく歪形であらふ。斯様に静止系観測には矛盾を生ずる。古への聖賢哲人は此矛盾から如何に眞理を發見せむかに努力せられた。そうした努力の中に、人生其ものが矛盾から抜け出して、遂に汽車の中に飛び込んで仕まつた。即ち矛盾に抵抗することを止めて、宇宙の流れに身を托した。之れ絶対観である。

今二つの汽車が同速度で走つて居るとき、相對的には静止の關係にある如く、汽車は實際には走つて居るのであるけれ共、車内は人も荷物も皆靜である。之を動中の靜といふ。故に矛看が向ふにあるのでは無くして、觀測坐標の錯誤から自分に存するのであつた。然し車内に閉ぢ込もつた儘では外界との交渉がない。之を小乗といふ。假に周圍を離れて自分一個なれば、どんな考へ方をしても差支へない。思想は自由に展開する。然し空想になり易い。そこで窓外に眼を轉ずれば電柱が一本一本飛んで来る。自分が動く代りに向ふが動いて居る。車上に身を托すれば、實に氣樂である。然し車上は自分獨りで占領することが出来ぬ。皆と一緒である。よつて外界との交渉が始められたとき、吾れ人皆と共にありと悟らねばならぬ。之れ絶対より見たる相對觀にして之を大乘の境地といふ。先づ斯様な關係だろうと考へます。そこで大乘の境地に於て、車上から見るとき落下の状態

が直線的である。之れ世の中の動きが眞直に見えるといふ原理であらうか。

絶対より見たる相對に落ち付くことを、もの其ものになり切るといふ。例へば花を見て美しいと思ふ。其觀賞のみの心持ちで純なるとき、なり切る心持ちである。然るに普通は花が美しいと思へば直ちに之を摘んで取る。自分のものにしたたいといふ考へか起る。觀櫻會でも觀楓會でも、天地自然の雅趣に心の埃りを清めることは結構であるが、文字通りの櫻狩り、紅葉狩りの氣持ちになつては、その美觀になり切る事は出来ぬ。又自分の着物に柄を選びをする。此柄は誠に好きな柄だと感心する。其嗜好になり切ることが出来れば、それを強いて買ひとり自分に占有せねばならぬこともない。陳列窓にあつても感心する、人が着て居ても満足する。柄其ものに感心するのが、なり切るのである。病氣にしても同様で、病氣になり切るとき、其病氣によつて感ずる範圍の苦痛に堪へ忍ぶより外に方法はない。然るに恰も狐でも付いて居るか如く、自分以外のものゝ如く、之を振り切ることに氣があせる。然るとき病氣が益々恐ろしくなる。即ち強迫觀念となるのである。そんな無理な考へ方、作り事の考へ方は出来ないと片付けて仕まつたら、夫れ迄のことであるが、人間本位に立つことが凡ゆる矛盾の基本である。そこで味噌も糞も一緒にする譯に行かぬので、悟る可き時に

は悟る丈の用意が必要である。よつて此矛盾を見て見ないようにする工夫が宗教的であつて、自己本位が小乗となり、大衆本位が大乗となる。更に民族的反省から人間の流動坐標を自覚し、日本眞神の抱擁の中に投ずるとき、眞乗となる所以かと考へます。そこでもの其ものになり切る處迄は、理性の批判で或程度迄進むことが出来るが、なり切つた處でもう一步高い處にある高天原の参上りが大切であると考へます。之れが神話に於ける素神の参上りの一條だと拜察します。そして此信仰が實生活と結び付いたのが天孫降臨の日本肇國と解します。更に非常時に於ける建設が日本建國と解されるのであります。

かよふの次第で、靜止系觀念で四次元の世界を見ると歪みがある。即ち回轉運動の圓周上の時計に遅れが来る如く、又指尺の目盛りが縮小されてゐる如く、時間空間の上に變形がある。故に信仰上の問題も是迄一般眞理とした通念を置き替へねばならぬ。即ち日本眞神の信仰に立脚するとき、吾に佛性なく、神性亦なく、心の鏡によつて神の靈を載いて居ると悟ります。日本神話の教へ給はる處は民族の一分子として神國に奉ずる神の使命であります。カイゼルのもものはカイゼルに返せの譬の如く、神のものは神に返さねばならぬ。大國主命は神の使命によつて中ツ國を經營せられ、完

成の後 天照大神の御神勅の儘に、天孫に御奉還遊ばされました。故に中ツ國は常に天孫に歸一する信仰の世界であつて、人間本位から翻つて神の大前にひれ伏すことである。然る時宇宙は矛盾でなくて、生成發展となる。現象は因縁に非ず、辨證法に非ず神のむすびとなります。

鬼に角一般宗教の神佛は、其教義に於て人間の靈性を先きにとらへ、之を擴大念寫せるものゝ如くであるが、高天原の信仰は神が基本であらせられ、神の靈が各個の上に宿る處の天降りである。故に他教は神が投影であり、日本神道は人間の靈性が投影となるのであつて、信仰の基本に順逆の相違ありと見られる。故に日本祖先に自覺されたものは個人生命でなく、大八洲といふ國家生命であつて、個我は國我の中に没入されて居る。尙茲に、日本神話の特異とする點は抽象的理論に偏せず、實踐に重きを置かれてあることである。されば神の祭事がいとも壯嚴に行なはれて、神話が地名に結び付き、神社に結び付いて居る。故に傳説地のあることは日本神話の誇りとす可き處である。斯様に事實即眞理の原則が含まれて居りまして、之れが民族の共同信仰として國教であるから、祭政一致と申されたのである。宗教が假りに世界教の誇りを持つても、國を持たねば生命がなくなる。日本神話は實踐と共に、神國の指導原理である。事實を伴はねば、假りに人間の慾求に迎



合しても眞理たることは出来ぬ。されば實踐眞理を奉ずることが、人間永遠の道であつて、日本神話の精神に深く反省を致し、眞に其尊嚴を拜せねばならぬことを感銘する處であります。

### 三、四神一體論

是迄日本神話が下積みにされて來たことは、要するに神道に教義が少なかつたことが、其大なる原因と見られるのである。即ち信仰の表現として、祭式には實に莊嚴なる點を拜するのであるが、教義の方面は恰も節句の雛段に人形を并べたる如く、御神名を并べた處で、それが吾人の信仰に基礎付ける力が少ないと思ふのであります。

其點になると日蓮上人の南無法蓮華經は方に佛教の一大進歩であつたと考へられます。法華經には釋尊の眞精神が打ち込まれてあつて、それが掌ろ佛滅後二千年以後の末法の世に實現すると云ふことに基礎付けて眞理に重きを置かれてある。即ち妙法によつて佛の本體を知るといふことでありまして、其妙法を自己の反省の中に發見せよと申されたのである。何れの宗教も反省が其端緒である

可きことで、其時代時代の反省が妙法を把握せねばならぬのである。

末法の世と申せば悪い意味に解されるけれ共、實は理性の尤も進んだ時代で、佛の方便を信じ得ない時代のことを云ふのであつて、文化の進んだ時代が信仰の立場から末法の世に當るのである。故に釋尊の眞精神によつて、方便を用ひず、只妙法其まのの中に本尊を拜まねばならぬことを、日蓮上人が強調されたのであります。其妙法が法華經の中に説かれてある處から、南無妙法蓮華經が創始された次第と解されます。

然らば日本神話の中にも斯様な妙法が存するかと云ふに、大に妙法が存するのである。即ちそれは神國の妙法にして、之を肇國の原理といふ。故に日本神話の中に流れて居る處の眞精神をよくよく玩味して、皇道信仰の確立を得ねばならぬことであります。宗教の方面に於ては大乗小乗といふ區分があるが、何れも人間本位の建前から生れて居る。故に大乘以上のものはない筈であるけれ共、日本神話によれば人間本位といふ、大きな溝を思ひ切り飛び越えて、神に歸依して仕舞ふ處の、眞乘と申すべき絶對性が存する。故に皇道信仰には神の使命以外批判の餘地なきもので、到底外國思想と相容れざるものと解します。

然し乍ら人間本位の方便から一足飛びの眞乘に到達することは甚だ困難である。即ち二階と下といふ居所の相違があるから、其途中は階段によらねばならぬ。故に眞乘に行く途中として、小乗も大乘も必要だと云ふことが考へられるのであつて、皇道信仰が他教と矛盾衝突する筈はなく、一切教を抱擁して總べての上に窮極點を示せるものたることが窺はれるのであります。

さて日本神話に一貫して流れて居るものは、自己の魂を見つめて行くことにあります。魂を見るといふても漫然と見ることでなしに、魂の構造といふか、内容といふか、とに角魂を分析玩味して、其働らきを見つめることである。然るとき大和魂の内容が卵に例へられてある。

日本書紀に「天地未だ分れず、陰陽別れずあるとき、渾沌たること鳥の子の如く、くぐもりて牙を含めり」と申されてあることが、實に貴重なる觀察である。然して 神武天皇の御即位のときは、「天祖始まりて此方一七九二、四七四歳を経たり」と云ふてありまして、史實として見るならば、其年數には一寸信を置き難いのであります。之を信仰の上から解釋すれば、ヒナクニシナシ（雛國死無）と云ふことが表現されてありまして、神武天皇の日本建國が、天地初發の卵から雛が生れて來たことに例へられたのである。そこで天照大神の天壤無窮の御神勅が、日本建國にも

含まれて居ることが明らかに窺はれます。

そこで卵の構造と云へば、外殼、白味、黄味、カラザ、牙の五ツである。此牙に特に御位種子神の名を附與されて居りまして、此牙があるから卵が生きて居る。即ち生命の本源である。斯様に日本神話の信仰は、いのちと云ふことに特に注目されてあつて、彌榮といふことが信仰の根本をなし、次いでまことを完成していのちとまことの二元信仰となるのであります。

さて今日の常識では人間の心を智情意の三ツに分解されて居るが、神話の上では和魂（情の方面）、荒魂（意の方面）、幸魂（智の方面）と申されて居る。此三魂は働らきの上から智仁勇の三徳となります。次に此三魂を綜合統一するものを申魂と申される。此申魂に尤も大切な働らきあるものとされまして、民族精神の基本となります。御稜威を戴く精神は此申魂の働らきであります。

そこで日本神話では観心悟魂見神と云ふことによつて、神の信仰が得られるといふのが原則であります。一體、神でも佛でも観る可きものでなくして、見えるといふのが本當の解釋であります。観は詮索する意味の見方で、丁度鶏が餌をあさる如くに、心の中を詮議するのが観心であります。又見は見るとはなしに見えるといふ意味の見方でありまして、日向の高千穂に入れば山岳圍繞の景勝

の中に、穗日二上峯が實に壯嚴に、見るともなしに直ちに目に付く。あの山は何といふ山だらうと云ふ様に、山の姿が誠に氣高く、氣が引き付けられる。其他、穗觸峯でも、祖母岳（添山）でも高千穂の聖域の中に靈峰として、よく人目を引く處から、此等の山々が、天孫御降臨の高千穂を代表する山として、日本書紀に此三ツを拾ひ上げられてあつたと解することが出來ます。

故に觀心といふのは自己内省に大いに努めることである。然るとき民族意識の確立から、心は單なる自己の所有でなくて、神の授け給ふ所であることを悟るとき、魂の本體が分つて來る。それと同じ時に高天原の神々が見えるといふ順序が觀心悟魂見神であります。

日本神話は他教と相違して、宇宙觀が先きに確立し、人生觀が後に廻されて居る。左様な建前から、宇宙は天地人の三界に區分されます。即ち神話が民族的信仰となつて展開されて居る。然るとき人間の心は鏡として神に授かるのであつて、是迄人間本位の理想として觀念した處のもの一切が神の使命として自覺されます。其使命は眞善美一體融合のまことの命する處であるから、自己の全部が神の前に投げ出されるときに、神の信仰が成立つ所以と解されます。

そこで高天原といふのは時間と空間の融合せる世界、即ち信仰の上からまことといのちの融合する

世界で、之を絶對の境地といふ。然し空又は無の如きものではなくて、まことが其本質であるから光明世界と申される。又地は宇宙を時間と空間に分解したる相對世界にして、相對觀の上にあらゆる妄想が起る。哲學的に之を矛盾といふ。人間本位に考へるとき、因縁となつたり、運命となつたり、此妄想に色々な解釋が下される。

そこで人間本位の相對世界から、高天原に参ひ上つて神の使命を自覺し、然る後再び相對觀に戻つて見るとき、人間界が統一されて中ツ國として信仰の世界となる。之が天地人三界の關係である。故に中ツ國は個我の人生觀が國我の觀念となつて、同時に共同の中心に歸一するといふのが建前になるのである。之が神話に於ける素神の参上りと、天孫降臨となる二大重點であります。

兎に角日本神話に於ては人間の靈性が認められないで、一切が神靈の働きである。即ち天孫降臨に於ける國ツ神、猿田彦神の御役目は絶對と相對の融合を導かれたものと解されるのであるが、御用がお済みになつた後、伊勢に歸られて隱居の身となり、濱獵に行き、月日貝に咬まれて海底に引き込まれ、其魂は三ツに割れて、再び此世に出られなかつたと述べられてあります。

そこで日本神話の信仰は、一切が神の使命であり、神の爲めに道を行ふと云ふのが本旨で、吾人の

自覺する處の魂も、神より出る光明を認識する如きもので、其光明の本体が神であらせられる。例へば吾人は電流そのものを見ることは出来ない。然し電燈の光りによつて、電氣が來て居ることを知るのと同様な、其間に心靈的の働きを自覺するのである。故に直接に神に接すると云ふものではなく、自己の魂を通して神を拜むのである。

斯様に魂が神のものだと云ふことを知りまして、茲に魂には四魂の内容がある。此四魂を總稱して大和魂といふ。即ち四魂一體觀であります。之が日本神話の基本でありまして、之が更に四神一體論を産み、神話の全體に涉つて織り込まれて居ることが明らかに悟られます。佛教は一念三千説であります。然し日本神道は斯様に四神一體觀であつて、歸納と演繹の相違の如く、此點にも順逆があります。

そこで神話の上で綜合神としては伊弉諾神、天照大神、大國主命、瓊々杵尊、神武天皇の五柱であらせられまして、それぞれ其御働きが他の四神から表現され、更に補翼神があつて神話の體系をなして居ります。三種の神器も同様に四神一體論を表現して居ります。其關係を左に對比すれば、

卵	子	外	殼	白	味	黄	味	カ	ラ	ザ
大和魂	和魂	和魂	幸魂	荒魂	申魂	信仰	曲玉の鎖	曲玉の鎖	信仰	魂
忠	孝	仁	智	勇	信	信	曲玉の鎖	曲玉の鎖	信	仰
神	器	曲	鏡	劍	劍	劍	曲玉の鎖	曲玉の鎖	信	仰
諸	神	ウイヂニ神	ツヌガイ神	オートノヂ神	オモダル神	オモダル神	オモダル神	オモダル神	オモダル神	オモダル神
天照大神	鈿女命	思兼命	建御雷神	高産靈神	高産靈神	高産靈神	高産靈神	高産靈神	高産靈神	高産靈神
瓊々杵尊	火照命	彦火々出見命	火須勢理命	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊	鵜葺草不合葺尊
大國主命	葦原色許男命	大穴牟遲命	八千矛命	現國玉命	現國玉命	現國玉命	現國玉命	現國玉命	現國玉命	現國玉命
神武天皇	稻氷命	三毛入野命	五瀬命	磐余彦命	磐余彦命	磐余彦命	磐余彦命	磐余彦命	磐余彦命	磐余彦命
綜合	合	一	二	三	四					

右の各柱に就いて御本質を詳細に反省しまして、夫々の關係を考ふるに、次の如くであります。

一、諸神

諸神は國産み神産みをなされて、現實界の基礎を完成なされたる神であらせられまして、高天原の神靈の展開が順を追ひまして、諸神に於いて完結された處であります。故に天神七代の内、十柱五組の最終に立ち給ひ、其以前の神々を以て四神一體を示されて居ます。尙其以前の神々は天地初發以來、造化三神に於かれて産靈を司り、天常立神と國常立神が絶對と相對の兩世界を立てられませんが、魂の完成する前の渾沌とした途中であるから四神一體論に一致されて居ない處であります。即ち古事記に別天神と申されたる處である。

## 二、天照大神

天照大神はいのちとまことの融合點に立ち給ひ、高天原の神々を全體的に背負ひ立ち給ふのであります。茲に天照大神は天ツ神の御本系を以て、中ツ國の君たる可しと宣らせ給ひて、天孫を降臨せしめ給ふのであります。然し中ツ國が大國主命によつて大體完成されました處に於いて、天孫をお降しになりますので、其間中ツ國の情勢を度々使者を以て偵察せしめられます。又天岩戸開きの一條に於ける神々の御働きを綜合して拜察しますとき、思兼命は智慧の神であり、建御雷神は武勇の神であり、細女命は仁慈の神であり、又高皇靈神は常に天照大神と對座されまして、天照大神

の御計畫を一々御承認下さつて居りまして、申魂を表現された處であります。

## 三、大國主命

大國主命は國ツ神にして、素神の御延長として國家建設の準備をなさつたが、根の國に行かれて素神に就いて大に修養を積まれ、四魂を完備されました國主となり給ふた。然し幸魂申魂は少名彥神にして、魂のみを三諸山に祭られたことから推して、茲にも魂は神のもので、人間の所有でないことを説かれてある。而して大國主命は、「亦の名大穴牟遲神と申し、亦の名は葦原色許男神と申し、亦の名は八千矛神と申し、亦の名は現國玉神と申す。併せて御名五ツあり。」と記されてある通り、四神一體論を總括的に述べられて居ます。

## 四、瓊々杵尊

天孫瓊々杵尊が中ツ國に君たらせ給ふて後、神武天皇に至る迄、其間の神々が瓊々杵尊の御分神として、御働らきを表現されて居ます。尙天孫降臨のことに就いては特に次の様な點があります。天孫降臨にはまづ天照大神の御子第一神天忍穗耳命がお立ちになる筈でありました。然し忍穗耳命は君臣の道を司り給ふ神として、中ツ國にお下り遊ばす譯にゆかぬ。即ち五道は天照大神の命じ給

ふ天道にして、人の道でないことでありまして、他の四男神と共に高天原に御止まり給ふことになつたのである。故に天孫瓊々杵尊がお降りになりました。而して瓊々杵尊には三柱の御子があり、然も火の中からお生れ遊ばしました。之は火によつて穢れを清めてお生れになつたことであります。諸神は水によつて清めをなさつて居りますが、神道に於いては水又は火によつて穢きがなされることが了解されます。

さて其三柱の命の内、火折命は山幸彦と申し、火照命は海幸彦と申上げる。此兩神の間は、始めの内、仲睦しく見えたが釣針のことから争ひが起つた。之れは感情と理性の相刻であります。即ち感情一方で行くことは應々にして脱線がある。茲に山幸彦は幸魂を表現され、海幸彦は和魂を表現されて居ますが、海幸彦が遂に山幸彦に詫をお入れになつて、其後は仲睦ましくなされた。山幸彦は龍宮の海神より玉手箱を授けられました、其玉の力によつて海幸彦に勝を制せられました。之れ理性によつて海洋の如き大度量が感情をよく制したことであります。故に幸魂が三魂の内でも大切なことである。

瓊々杵尊は特に山幸彦（彦火々出見命）がお氣に召されまして、お後を繼がせ給ふて居りますこと、理性と云ひ、智謀といひ、又眞理といふも何れも幸魂より出づるもので、信仰の基本に尤も重要な役目を持つ處であります。大國主命は國土經營の最後に幸魂申魂を得て大國の主となり給ふた。茲にも幸魂が大切なことを訓へられてあります。

彦火々出見命の次に鵜葦草不合葺命がお立ちになり、次に四皇子がお生れになります。不合葺命には御兄弟がなくて、只一柱にましましたが、神話の上で偶然と申せば偶然の事柄の如くであります。けれ共、實は申魂を表現されて、瓊々杵尊の御本質を完成され、然る後神武天皇をお産みになつたと拜察されます。以上の如き四神一體觀であります。

#### 五、神武天皇

神武天皇は磐余彦命と申し、四皇子の内、第四子であらせられます。第四子が御東征の御先達にお立ちになつたと云ふことが、日本の家族制度から申せば異例の如く解されますが、信仰の上から神武天皇の申魂であらせられたものと解しますとき、よく了解されるのであります。

そこで四柱の皇子の御名が稻氷命、五瀬命、三毛入野命、磐余彦命にして、同様に四神が一體に歸することを示されて居ると拜察します。而して御東遷に就いては、三毛入野命と稻氷命とは留守役

にお残りになり、五瀬命と磐余彦命とが御發轡になつて居ります。茲に稻氷命は和魂を表現され、三毛入野命が幸魂を表現され、五瀬命と磐余彦が荒魂申魂を表現されて居るものと解するとき、非常時に於ける荒魂と申魂の活動がよく窺はれます。

さて皇軍は海路數年、大和にお入りになつて、長髓彦の軍の爲めに大に苦戦遊ばされ、五ツ瀬命は遂に流れ矢に當つてお崩れになりました。即ち日神、天照大神に向つて軍を進め給ふたことがよくなかつたのである。五ツ瀬命の御崩御は賊軍が優勢にして、皇軍の士氣沮喪されたことであります。即ち荒魂を失ひ給ふたのでありますが、神武天皇は進路を變へ給ひ、熊野路にお入りになり、日神を背負ふて進撃遊ばされました故に、長髓彦の奉ずる饒速日命も、皇軍の正しき御系統たることを悟られて、茲に長髓彦を殺して降服せられたのであります。即ち天照大神を奉ずる戰さでなければ武勇の挫折があることを物語られて居ます。故に熊野路にありては五ツ瀬命の御崩御の御代りに、天照大神、高産靈神の御計らひがありました、改めて建御雷神の荒魂をお授けになつて居ります。又八咫鳥の御稜威が輝いて居りますことなど、神業の御軍であつたことが、信仰の上からよく了解されるのであります。

茲に饒速日命は瓊々杵尊の兄君に當らせられますが、何故天孫としてお降りにならなかつたかと云ふことに疑問があります。史實のままとすれば考慮の餘地なき處なれ共、此點を信仰の上から反省を深くしまするときに、饒速日命と瓊々杵尊の對比は大乗神と眞乗神の優劣の如く推察されまゝす。即ち人間本位で行くとき、其極致は大乗であるが、日本神話の信仰は高天原の參上りあることによつて眞乗たることである。即ち人間本位の圏外に出ることによつて神本位となるのである。故に普通に神と申して居る言葉の内にも、大乗神と眞乗神との相違があり、更に下つて小乗神もある。

一體信仰は神に向つて求むるものに現はれて下さる。けれ共、其求むる程度に應ずること、小乗のものには小乗神、大乘のものには大乘神が現はれて下さる。人間の心は恰も鏡の如きもので、鏡の前に青い色を持つて來れば青色が寫り、赤い色を持つて來れば赤色が寫る。又水は方圓の器に従ふと申す如く、自分の氣持ち次第である。故に人の心の計り難き如く、他人の信仰に立ち入ることとは出來ない。然し乍ら人間本位で行くとき大乘以上のものになり得ないので、民族本位に樹立されたる皇道信仰の神と大乘神と同座されることは出來ない。

そこで饒速日命は大乗神であり、瓊々杵尊は眞乗神となられ、其御資格の上から中ツ國にお降り遊ばしたと解されます。そこで大乗は下より上への教へであるが、眞乗は上より下への道だと悟ります。

以上によつて考へますに、日本の神様の御本質は、多くは心靈神であらせられ、四神一體論が其原理となつて居る。然し神話の信仰は只觀念の上のみから來たものでなく、史實と共に成立したる點に尊とさがあつて、人格神が共に存せられてあつたことである。故に天御中主神以下の神々の中、心靈神と人格神との區別は、傳説のみで判じ難い處であるけれど、要するに天ツ神は心靈神に涉らせられる故に、天孫御降臨に至る迄の神々は心靈神と見奉る可きである。又國ツ神は人格神一體が四柱の心靈神の表現をお持ちになつて居ることを推察することが出來ます。然し乍ら天孫御降臨のことは、信仰の上に成り立つものだと考へるとき、四神一體論を史實たらしむる確實なる處は、神武天皇に於かせられて、人格神にましますものと拜察することが出來ます。

然るに日本書紀に天神七代地神五代と申されてある爲めに、地神を國ツ神と解し、同時に人格神と解釋することは矛盾に逢着する。例へば地神五代の始めは天照大神にあらせられます。此解釋か

ら天照大神様が此國土に下り給ふて、人格神として御神業遊ばしたものの如く説く向きもあるけれど、それでは天安河原のウケヒの神産みや、天岩戸開きが人間業に類することになる。故に地神の解釋は現實界に立脚した眞善美が一體として生きて居る境地の神とせねばならぬ。故にいのちとまことの融合せる世界に、天照大神に於かせられて高天原の本質を完成遊ばされたることと解されまこと。故に其以前はいのちの方面から別天神であらせられ、まことの方面から天ツ神と見奉る可きであります。而して地神の次に人皇第一代として神武天皇がお立ち遊ばして居る處であります。されば地神五代の中、人格神をお持ち遊ばす神が何方様であるか、史實の上から證明されないにしても、只神武天皇が人格神にましまして、日本神道の實踐を國家組織の上に完了遊ばしたる一基點に立たせ給ふことが實に尊とい處でありまして、其皇統の御延長の上に常に 天皇陛下を通して神話の信仰を戴くことは日本人の尤も幸福とする處であります。

又此事は現代に移し活かして見るとき、信仰と歴史の大に相違する點にして、歴史は過去の事實を證明したものであり、その史實を其儘現代に活かし得る性質を備ふるとき、之を信仰といふ。同時に現在の事實を將來に向つて亦活かし行かれる性質のものである。左様な性質のものは民族的反



省の上のみに出来得ることであつて、民族の無窮生命の中に其信仰を活かしてあるのが日本神話の特徴である。

斯様な見地から見たとき、瓊々杵尊は平時に於ける民族の活動を表現遊ばされ、神武天皇は非常時に於ける民族の活動を表現遊ばされ、日本肇國より日本建國の期間に於いて、神國の態形が完結されてある。其完結が、肇國と建國との二元一體にして、現代の國家組織から天皇陛下は天孫として御降臨遊ばすと同時に、昭和の神武天皇に涉らせられます。同様に明治天皇は明治の神武天皇であらせられ、大正天皇は大正の神武天皇であらせられまして、其年號を冠して神武の尊號を略されて居りますが、斯様な信仰上の御本質は將來に向つても、神武天皇の御降臨であらせられます。そこで天皇陛下は御一人の人格神にましまし、四ツの方面から民族の働らきを表現遊ばされます。即ち立法部、行政部、軍部の三方面と、更に三ツを總括する御稜威を併せて四柱である。何れも其働らきの上から區分されるもので、一人格として之を捉へることの出来ない心靈的のものである。故に神典の上には神以外、人間の元祖となるアダム、イブの兩性を説明されたる處がなく、皆神々の御活動が神話となつて居る。

そこで瓊々杵尊は平時の特色を表現されます。即ち火照命と火折命との相刻は立法部と行政部との關係であつて、立法は眞理に基く處であり、行政は仁政を基とする處である。王道霸道の政治には此點が判然して居ないから、王者の爲めに立法が非眞理たることがあり、行政が暴虐たることがある。立法が眞理なれば行政は之を犯すことが出来ない。斯様に皇道には矛盾がない。此事を訓へてあります。

次に神武天皇は非常時の特色を表現されて居ります。神武天皇の御東征は磐余彦命と五ツ瀬命の二柱の御發輦になつて居りまして、荒魂と串魂の出動であります。現代の事變に之を翻譯すれば軍部が御稜威を背負ふて立つて居ることを説明して居る。又立法と行政は銃後の守りであつて、和魂幸魂が留守役をなすのである。よく皇軍戦捷に對して申されます言葉が、

「この結果は因より御稜威の然らしむ處であるけれ共、又將兵諸士の忠誠武勇に依る處である。」  
 斯様に申されまして、常に荒魂と串魂が皇軍を強からしめて居ることは、神武天皇の日本建國の信仰に一致する處である。まづ斯様に現代の組織に移して、日本神話を解釋したならば、其精神が尤も分り易くなるのである。斯くの如く、日本神話は民族的活動の敘述であり信仰であるから、御神

名の一切を個人本位の思想の中に活さむとしても、活かして考へられないのであります。

そこで日本の神々には心靈神と人格神との区分がある。然もそれは本體に影の添ふたる如く、別ものではないことを銘記せねばならぬ。そして四神一體論が根本となり、民族は全體として八百萬神を表現するのである。そこで心靈神をお祀りするとき神社といふものになり、人格神をお祀りするとき、御陵といふものになる。故に神社に於ては其信仰の對象に御鏡を祀ることが本旨で、木像や偶像をお祀りするのは日本神道本來の主旨でないと解します。

とに角信仰問題は是迄色々に解釋されたことではありますが、正しき信仰は眞理と共に存することである。即ち教義が眞理であり、眞理が教義であらねばならぬ。活きたる眞理は神の眞理以外になり。故に過去のことと同時に現代に當てはまる様な信仰が正しきものであつて、今日の反省が昔を生むことが出来るか否かが、信仰の正否の分岐點である。然し歴史なしには今日を得ることは出来ない。故に反省が歴史に逆行する如くであるが、實は反省が歴史に育まれながら、然も歴史を活かしつゝ行くのが本當の信仰であり、將來に對しても正しきものである。

日本神話の敘述は方しく斯くの如き本質のものである。故に是以上完全なるものがないといふことを確信して一點の疑も存ぜない。正に日本神典の精神が活神道なりといふことを得ます。

#### 四、日本肇國と建國

以上の反省に於きまして、神武天皇御一柱は人格神にましまし、之を御本體として四柱の心靈神が一體をなし給へることを信ずることが出来ます。然し天孫御降臨に就きましては、神社と御陵との關係から考ふるとき、瓊々杵尊の可愛山陵、彦火々出見命の高屋山陵、鷄葺草不合葺命の吾平山陵といふ日向三陵の存することであるから、此三柱は人格神と見奉らねばならぬ。然るとき瓊々杵尊のみを人格神とする四神一體觀を立てることは出来ない。然し乍ら古代神道の信仰は其對象を多くは山岳に求められたことで、例へば少名彥神の幸魂申魂を三諸山に祀られました。又磐境や神籬を樹立されました關係から考へても、山陵は神社の前身ではなかつたかと解されます。然し此事は誠に畏れ多いことに屬するので、輕々に推斷を許されたい。然し神武天皇の御事蹟に關しては四神一體の信仰が成立つものと解されます。即ち神話の上で神武天皇の御東遷前、稻氷命は海原に入り

給ひ、三毛沼命は常世國に涉り給ふたとあつて、人格神としてよりも心靈神と解し奉ることに矛盾を感じないのであります。故に日本建國は神武天皇御一體の御神業と解されます。斯様に神武天皇御一體の日本建國が大和の國に於て、日本肇國の延長の上に建設遊ばされたるものと致しますとき、日本神話の信仰は神武天皇に於かせられて御完成遊ばされたることであつて、之を全然信仰丈けの上から拜察しますとき、日本神話は二千六百年以前、其かみに於ける信仰の一切でありまして、恰も釋尊によつて凡ゆる方面に佛菩薩がお生れになつた如く、神武天皇様が人格神として神話の上の神々一ちを脊負ひ給ふて、日本肇國の基礎の上に更に日本建國の一大神業を増建遊ばされたることと信じて差支へないこととあります。

最近の學説として神武天皇御一代論がありまして、相當根據あることと察しますが、又高千穂に存する古文書から見ましても、同様のことが考へられるのであります。茲には信仰方面のみから四神一體論を以て、神武天皇御一代説を左様に信じたいと考へるのであります。此推斷を許されるものとせば、三毛沼命をお祀りしてある高千穂神社は取も直さず、神武天皇をお祀りされたものに相違なきことで、日本肇國の信仰が日向の高千穂に生れて、高千穂を中心とした九州一圓に涉る傳説が

神武天皇の御事蹟を共に物語るものだと解することが出來ます。

今日高千穂宮の所在が不明とされてありまして、實際歴史の上から證明の付き難いことだと思はれますが、其所在を探ぬる上に、日向の高千穂に更に更に充分なる研究の餘地の存することを感ぜま

す。

要するに日本神話は天地初發より日本肇國迄と、日本肇國より日本建國迄の二期間のことを物語る處の古代史であると共に、日本民族の信仰である。されば日本は神國なりといふことは單に太古のこととでなしに、常に太古の延長の上に現在も神國だと云ふことが、日本獨特の點であり、斯くの如き信仰上の神國であります。故に現代的の言葉を以て言へば、神話は日本民族の反省なりと云ふことも出来る。即ち光榮ある歴史を持つ處の反省の順序が日本神話であります。若し今日、日本神話が存しないものとしたならば、正しき信仰の上から日本神話と同系のもものが、吾人の反省の上に、完全なる道として生れて來ねばならぬ關係のものである。左様なことは單純に出来ることではないのであるから、幸ひに古事記、日本書紀があつて、反省を導いて戴くことが如何に有難いことかと感激の外ありません。

とに角日本肇國は平時の信仰であり、日本建國は非常時の信仰である。世界は平和と戦争を繰り返へす。然し戦争は戦争の爲めの戦争でなく、平和の爲めに自然誘導される。而して其戦争の結果に平和がもたらされるけれ共、神の道に反する平和には再び戦争が起る。其平和と戦争を繰り返し乍ら、漸次に平和の範圍を廣く大きくして行くのが日本民族に脊負はされたる使命である。故に日本肇國と日本建國は皇國體の両面にして、此二元を併せたものが皇道信仰となるのである。此二元一體が茲に八神一體論となるのであつて、八神の歸一が高天原に於て天照大神であらせられます。此信仰は天地人三界の基本から展開される。日本神話の全體を通して三と八の表現が澤山にあります。又民族を全體として見るとき八百萬神にして其無窮生命を千五百の數にて表現されてある。故に日本神話の信仰は八百萬神として共同奉仕する處の神の使命を自覺することである。外國思想の人格論は神話の精神に反するものであつて、平等主義を奉ずる單位思想は全然相容れない。お互が神性を持つて、神になり得ると觀念することは天地人三界論から云ふとき誤謬にして、只八百萬神として一體をなすより外にないことである。故に個我の對象に日本の眞神を拜むことは不可能であるふ。

天岩戸開きでも、天孫御降臨でも、日本建國でも、すべてが民族共同の精神を以て同一中心に歸一したる處に實現されて居ます。

茲に教育勅語の精神を反省致しますに、日本神話の内容が寸分洩るる處なく、神話の信仰を現代人に御神示給はりたる大聖典なりと悟るのであります。即ち、教育勅語の御始めに高天原の御神業を稱へ宜らせ給ひ、續いて

「智能を啓發し徳器を成就し」

と宣らせ給はりたる一條が、日本肇國の幸魂和魂の表現に相當し、

「一旦緩急あれば義勇公に奉し、以て天壤無窮の皇運を扶翼すへし」

と宣らせ給はりたる一條が、日本建國の荒魂申魂の表現に相當したる處と拜察します。是迄教育勅語は單に式場の一形式として、拜聴さして載いて來たことが、今日の反省に於て全く恐懼に堪へざる處であります。日本神話の信仰は教育勅語を通して反省することより以上に、よき道はないと悟ります。日本神典と教育勅語とを頂いて居る日本人の幸福は、大に世界に誇り得る光榮であります。

故に日本神話は世界無比の信仰として大に宣揚されねばならぬ。別に宣揚せずとも、精神科學の方面から明らかにせられ、國威は彌榮ゆるるのであります。少くとも、之迄の如く、日本神道が、御神名の羅列であつたり、部分的であつたり、又は總てが人格神にましまさねば氣が濟まぬ様な信仰であつては、正しき信仰たり得ないと考へます。紀元二千六百年を間近かに迎へ奉るに當つて、お互に日本神話に就き、深甚の反省が緊要なりと感じます。

日本人は歴史を重んずる國民である。然し乍ら神話の祖神を只に血族的系統の上のみから、御祖先と解して居つては、御神徳を汚す虞れなしとしない。故に二千六百年の紀念事業の上にも、只施設に止まる如きことであつては、其意義が永遠に残されぬ。必ず日本神話の信仰と教育勸語の精神とが共に之によつて宣揚されねばならぬことあります。

佛教に沙羅四見といふことがある。即ち釋尊が沙羅樹の下で御入滅になつた場所の解釋に色々あるが、佛の信仰と共に此土地を觀ることによつて、此國土の光明を拜することを得ることを説かれたものである。然し今日末法の世になつて、佛の信仰が生きて居ない爲めに、印度に於ける釋尊の御事蹟の一切が廢墟に歸して居ると申されます。

日本肇國と日本建國の二元が一體として、皇國體の本質をなして居ることを悟るによつて、大和と日向の顯彰が神話の信仰に基いて、東西相照して其顯彰の意義を明らかにされねばならぬことを切實に感銘します。

## 五、桃太郎主義

是迄桃太郎主義といふことを、よく申されたのであるが、此桃太郎の鬼征伐の物語が、日本神話の四魂一體論を尤も通俗な伽嘶に形を借りて綴られてあつて、肇國と建國の精神をよく表現して居ることに、深く思ひを致すのであります。

桃太郎はお婆さんが川から拾ひ上げて來た桃から生れました。只の物語として、桃の代りに柿を用ふれば柿太郎となり、梅を用ふれば梅太郎となるのである。桃は黄泉ツ平坂にて諸神の危ふき處をお救ひ申して、大役を買つた特別のものであります。故にオホカムツミ神といふ神名を戴いた光榮を有する果實でありますから、信仰物語として、梅や柿で代用されないのであります。

それから桃太郎の家來になつた動物が犬と猿と雉の三ツで、之も外に代用が效かない動物を撰擇されてあります。即ち犬は荒魂を表現し、尤も勇氣に富んだ動物で、獵犬となり、軍用犬となり、あらゆる危険に向つて突撃する積極性を持つて居る。方に勇氣の點に於ては第一位である。次に猿は猿智慧と申す如く、動物の中で尤も智の進んだ、人間の次に位する動物で、方に動物中の第一位であるから、幸魂を表現して居る。次に雉は燒野の雉子、夜の鶴と譬へられて居る如く、全く情に富んだもので、和魂を表現するのである。

次に桃太郎の戴いた團子がキビ團子で、多くは申指しにして喰へるといふ團子で、申魂を表現するのである。そこで此團子を犬も猿も雉も一様に貰つて居る。然も家來になつてから貰つたのでなく、貰つた上で家來になつて居る。實に用意周到の敘述である。即ち雉が最後であるが、桃太郎の歌にも

「雉も貰ふてお伴する。」

とある如く團子を貰つて家來になりました。即ち荒幸和の三魂が何れも申指しにされて一體になつたのでありまして、申魂の尤も大切なことを物語つてある。そこで桃太郎といふ大和魂が四魂一體

の形式を整へたのであります。

さて説明が最初に逆上るのであるが、爺さん婆さんは、日本民族のお祖先であります。所謂國ツ神と解すべきである。そこで爺さんは山に柴刈りに、婆さんは川に洗濯に出掛けました。爺さんが狩獵や、野良仕事に出掛けたのでないのが面白い處である。柴は火を焚く材料でありますから、火の褻きの用意であります。又川は水の褻き場であります。何れも日本神話の褻きを加味されて居ます。

次に山と川との對比が、神のまことといのちの對比である。山といふものは形ちによつて表現される。即ち空間的擴がりがある。又川は水そのものが川でなく、水の動きが川である。單に水のみにして其活動がなかつたならば湖水であつて生命を表現せぬ。鐵砲の玉と大岩石との前に立つたとき、筒口に向つた方がこはいに極まつて居る。故に活動其ものが生命力を表現するのである。即ち空間の變化が川であり生命であつて、同時に時間の觀念を附與する。故に空間と時間の融合が絶對の世界となる如く、山と川との融合はまことと生命の融合にして、茲に高天原を表現する。そこで爺さん婆さんの褻きの精神は高天原の信仰を載くと云ふことであります。

處が桃が川上より流れ來つて、婆さんの拾得する處であつた。爺さんが山の桃の木から採つて來たのでなくて、川上から流れて來たものである。其初めの所在は分らない。即ち桃太郎は爺さん婆さんの直接の子供でなくて、何處からともなくお授けを頂いたといふことである。故に人間の靈性は人間に所有權が存するのでなくして、神から授かるのだといふことを訓へられます。そして、川で拾ひ上げられたといふことが、信仰の端緒はまづ生命であつて、天地と共に成りませる神の御名を天御中主神といふ。このいのちのちの一點でありまして、更に桃太郎の出生が爺さんと婆さんの協力によることにされてあるが、高産靈神、神産靈神の陰陽兩神のムスビを説明されて居ます。即ち桃太郎の出生は造化三神のムスビを意味したもので、ムスビに産靈の文字が當てられてある如く、大和魂の出生であります。

さて桃太郎が次第に生長して、鬼ヶ島の征伐に出掛ける。鬼ヶ島とは根の國の妄想、又は相對世界の矛盾といふことである。故に征伐は侵略の意に非ずして、神の使命を奉じた、日本民族彌榮の、神乍らなる發展を指して云ふのである。即ち信仰上の觀念に實踐を伴ふたものである故に、之に先立つものは勇氣と智謀である。桃太郎の歌にも

「最先に付き來る犬と猿」

と云ふてある。續いて桃太郎の征途は勝利を拍した。即ち

「はけしい戦に大捷利、鬼ヶ島をばせめ伏せて」

とある。茲に素神は日本民族を代表して、お立ちになつた神で、此一句は高天原の參上りを説いてある。「即ち天に參上りますときに、山川悉くに動み、國土皆震りき。」とある如く、高天原の信仰を頂く爲めの努力は生やさしいものではない。次いで

「取つた寶は何々ぞ、金銀珊瑚綾錦」

之は素神と天照大神との間に五道と三德をお生みになつた神業を物語られたものである。日本の道徳はすべてが神の使命であり、其内容は教育勅語に詔らせ給ふてあります。故に神の使命として自覺することが日本神話の本義である。

そこで鬼ヶ島より凱戦の途に付く。之れが天孫の中ツ國に御降臨遊ばす一條に相當するのである。吾人が天孫御降臨を各自に自覺するとき、それは取も直さず、中心歸一の民族精神である。その爲めには大國主命の御修養を範として示されてある。

「犬が引出すエンヤラヤ」

建御雷神が高天原の使者として中ツ國を平定されました如く、又神武天皇の御東征に五瀬命が共に高千穂宮より御出發遊ばしたる如く、荒魂が實踐の主役であります。

「猿が後押すエンヤラヤ」

荒魂の後方には必ず幸魂が援助せねばならぬ。今日の言葉で申せば、常に理性が伴ふて居らねば、勇氣が眞勇とならず、蠻勇となり易い。又眞理が常に信仰の根本をなして居ることを説いてある。

「雉が綱曳くエンヤラヤ」

和魂が先頭に立つて、人を引き入れるの徳を建前とすべきことである。武士の情けとよく申されたる如く、日本精神は荒武者たることなく、情を以て世を救ふといふことが建前である。そこで天照大神は男神にまします、女神としてお立ちになりました。又天孫降臨の御一行の先頭に鈿女命が當られて居り、天岩戸開きにしても鈿女命の和魂によつて、萬座の笑ひを誘致されて、天地が再び平和に歸したと云ふ信仰を述べられて居ります。

以上三魂の働らきが申魂によつて統制され、茲に四魂一體として日本民族の發展が永遠の姿に於

いて營まれる。之を現代の國家の見地から反省すれば、立法部は幸魂(眞理に基く)、行政部は和魂(仁政を本旨とする)、軍部は荒魂(武勇を第一とする)をそれぞれ現はす部門となつて居りまして、それがひとしく御稜威の下に於いて、始めて各自の機關が重任を果たすことになつて居ります。即ち申魂は信仰の上から誠に不思議な心靈的のものであり、一名奇魂とも申されます。

此事は勝手な譯釋の様でありますけれども、天孫御降臨に際し、天照大神は五部重臣をお遣はしになりました。即ち形の上からは五部でありますけれども、精神機構の上では四魂一體を表明されて居ること以外ならぬのであります。天岩戸開きの一條を按ずるに、五部の内、天兒屋命は祝言奏上の神、太玉命は眞神を捧持されたる神、後世神事を司る中臣忌部の遠祖に涉らせられたることは、御稜威を彌々輝かせ給ふ役柄をお持ちになつたことで、申魂を表現されます。又鈿女命は仁慈の神で和魂を表現され、石凝止命は鏡造りの神で、幸魂によつて愈々發揮される處の荒魂を表現され、玉祖命は幸魂の表現に當つて居られます。

されば現代の機構より見るとき、鈿女命は行政の守護神、石凝止命は軍部の守護神、玉祖命は立法の守護神たらせ給ひ、以て四神一體觀を説明されて居ることを、斯様に現代の機構の上にも移し



て見られるのであります。

茲に夏目漱石先生の「吾輩は猫である」の一節を借るに次の様に言ふてあります。

「大和魂!!と新聞屋が云ふ。大和魂!!とスリが云ふ。大和魂が一躍して海を渡つた。英國で大和魂の演説をする。獨逸で大和魂の芝居をする。東郷大將が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を持つて居る。詐偽師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る。三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か、大和魂は名の示す如く魂である。魂であるから常にふらふらして居る。誰も口にせぬ者はないが、誰も見た者がない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か。」

然るに此魂が日本神話の信仰の中に始めて見出されるのであります。

桃太郎の物語が斯様に日本神話の精神、皇道信仰を餘す處なく敘述して、日常の教訓であり、信仰であることを感銘するとき、此物語の起源は相當に古いものであつて、日本祖先の信仰の中に、到底外國思想の眞似び得ない處のうるはしきものを以て、堂々たる精神文化の創設をなされてあつたことを氣高く拜されるのであります。

昭和十三年十二月廿五日印刷

昭和十四年一月二日發行

〔改訂版〕 (定價金貳拾錢)

宮崎縣高千穂町大字三田井

著者兼發行者 甲斐勝美

東京市豊島區巢鴨五ノ一〇八二

印刷者 矢島勇三郎

發行所

(日向、高千穂、三田井)  
振替熊本三九九五番

弘文舎

# 日本神話信仰論

(甲斐勝美著)

## 内容目次

- 【一】 日本神話の本領(人生の矛盾と神話の使命、神話研究の態度)
  - 【二】 日本神話の考察(序論、本論、結論)
  - 【三】 神話と自分(神話と人体構造觀、神話の世界的意義、神話と傳説地)
  - 【四】 日本は神國なり(神話と神の原理、吾人の信仰、神話と教育勅語、神話と皇道信仰)
  - 【五】 高天原の信仰(高天原と魂の世界、神話と日蓮上人、神話と淨土眞宗、神話實踐の工夫、神話と權觸神社、結論)
- (四六版二七〇頁定價一圓二〇錢送料六錢)

# 傳統の高千穂

(甲斐勝美著)

日本神話は出雲と日向に涉つた、古代日本民族の信仰記述であり、史實を信仰の融合せる處に中ツ國が完成されて居ます。本書は高千穂に現存せる傳説を古事記、日本書紀を中心として解説せるものにして、兒童にも解り易き讀物であり、又遠隔の地にありて、本書により凡高千穂の聖蹟を知ることが出来ます。

(定價三十錢送料三錢)

387  
584

日本神話宣揚いろは替歌

天あめそ晴はれ居ぬぬ神かむ立たちて

(天岩戸開)

懇ねんころ詔のらせ上うえゆ降おり

(御神勅)

久く志し布ふる流る里さとを御み稜い威つ別わき

(日本肇國)

四よ方も山やまにほへ末すゑ靡なひけ

(世界平和)

終